



シンポジウム

シンポジスト

竹内信男さん(登米町森林組合・参事)

出雲洋一さん(仙台市荒町商店街振興組合・副理事長)

岩瀬昭典さん(河北新報社・論説委員)

富田孝好さん(日本労働連合会事業団東北事業本部・本部長)

コーディネーター

菊間満さん(岩手大学農学部・教授)

竹下きいこさん(石巻地方中高年雇用福祉事業団・専務理事)



竹内信男さん、昭和45年より登米町森林組合にてお勤めになり現在では登米町森林組合の参事をなさっています。

出雲洋一さん、荒町にて文具店「光洋堂」を経営なさっています。現在荒町商店街振興組合副理事長、ならびに仙台市商店街青年部連合会副会長なさっておられます。また、託児所「まぜっこひろば」の代表もつとめておられます。

岩瀬昭典さん、昭和49年に河北新報社に入社され、政治・経済・社会分野など広くご担当になり現在河北新報社論説委員をつとめておられます。スローフード運動を取り入れた食による町おこしに関心をもっておられます。

富田孝好さん、日本労働者協同組合連合会センター事業団副理事長ならびに東北事業本部長をつとめておられます。また宮城県高齢者生活協同組合専務理事をなさっておられます。

続きまして、コーディネーターの紹介をいたします。

菊間満さん、北海道大学大学院農学部研究科博士課程を修了、林業政策論・労働論、住宅問題などをご専門に現在山形大学でご教鞭をとっておられます。

竹下きいこさん、昭和58年に石巻地方中高年雇用福祉事業団に入団、現在は専務理事をつとめておられます。また、日本労働者協同組合連合会の理事をなさっておられます。



竹内信男さん

登米町森林組合・参事



どうもみなさんこんにちは、登米郡は登米町の森林組合から参りました竹内と申します。

まず、ここに参加をさせていただきました理由、そして、われわれが取り組んでいること、さらに今後取り組んでいこうとすることをざっくばらんに申し上げたいと思います。よろしくお願ひします。

われわれは山村過疎の町で毎日一生懸命やっているつもりです。しかし、最近閉塞感というのか、行き詰っているのも事実です。協同労働という話を昨年お聞きしまして、はっきり申し上げてなかなか理解できませんでした。しかし今日、山際先生のお話を聞いておりまして、なるほどと、少し理解を高めたところであります。

今から15年前、20年前はひとつの山に、広葉樹の木を切って杉の木やヒノキの木を人口植栽していく、森を育てるということはすべて人工林化であるという国家的な使命を受けてですね、われわれの崇高な仕事だというプライド・理念というものがありません。近年松食い虫に喰われる被害が出て、どんどん枯れていきますが、ビニールをかけ、薬剤散布をして多額の税金を消費する、あるいは山の頂上、杉の適地ではないところに杉を植えてですね花粉症という5兆円10兆円ともいわれる花粉症医療費の大変な被害を出している。これは杉の花粉だけではないともいいま

すが、内部告発ではないですが反省を含めてどうも自分たちがいままでプライドをもってやってきたことがどうも自信をもてない、あるいは本当にこれでよかったのかと罪悪感にさいなまれるというようなことがあります。

かつては森林・林業というのは「われわれが一番なんだ」、市民の皆さんは全然わからないんだという時期もあったんですがどうもこの4、5年市民の皆さんと体験交流していきますとわれわれ以上に勉強して真剣に森林の役割・機能をきちんと整理している、と度々感じます。そうしたことで、謙遜するわけではないんですが、反省と勉強をかねて参りましたので、是非、さまざまなご意見をお聞かせいただきたく思います。

森林組合の現状の問題点はたくさんあります。絞ってみると、国産材の国内市場への供給の問題があげられます。日本の木材は1年間に1億立方が使われるといわれていますが、私の目算によりますと日本の木材の年間成長量は約1億立方です。したがって安定供給できる状態になりつつあるのですが、現状は外材が82、3パーセントで国産材は2割を切る状態です。毎年8000万立方ずつ日本の山に木材が蓄積されているというくらい資源的な熟成がされてきております。裏腹にこれまで国産材時代が来るように頑張ってきたのですが、ここにきまして木材の需要が減少し、価格が大幅に下落してきております。現在の日本の丸太価格は昭和35年よりも安い値段です。消費者の皆さんに届く木材はなぜ高いんだという問題が出てくると思います。それには流通のさまざまな問題があります。

一方では国産材は供給可能な状態までできましたが、価格が安くて木材生産の継続が深刻

な状態になってきております。しかもう一方からみますと国産材は外材よりも安く提供できる体制になっており、採算が取れるような形で供給できる生産体制のあと一步手前まで来ております。

森林組合の維持・運営困難だという話が先ほどありましたが、山村もコミュニティが崩壊してきておりまして、今までの森林組合、農協組織とか青年部などの継続が大変難しくなり、名ばかりのものがたくさん出てきております。総会の成立すら難しい状態です。若い人、息子さんが自分の山がどこだかもわからなくなってきたり、田んぼがどこかもわからないという漫画みたいな状況がでてきております。

これまでの林業政策では、木材生産の安定供給というものがすべての中心に据えられてきたわけですが、これからは環境保全森林の広域的な機能を持続しながら森林の役割を見直すところにきています。昨年大きく林業基本法が改正されまして、山村森林組合の皆さんは対応にさんざん苦勞しております。私たちの取り組みとしましては、いろんな課題がありますが、なんといいましても林業の従事者が高齢化しまして、後継者の問題が一番大切だということで、若い人の育成に焦点を絞って10数年前から進めてまいりました。

いろいろな取り組みをしてまいりまして、即効的な効果というものは出てきませんが、ドブに捨てるようなお金もたくさん使って反省しております。しかし、「100年の森づくり」を12、3年前からやっけてまいりまして、一昨年NHKの「新日本探訪」で取り上げていただきました。10数年前は「常識的ではない、何たる林業だ」と言われたものですが、杉と広葉樹が仲良く生息する山作りというものを、北上川の沢の羽沢川の源流の部分

から作り始めてきました。これについてはあとでゆっくり説明したいと思います。

またパンフレットにございますが、椎茸の原木栽培を基本としまして、いろんな異業種の方、白石の製麺工場さんとか地元の味噌・しょうゆ醸造メーカーさんとかですね提携しながらいろんな商品開発を進めてまいりました。製材工場、大工さんとも提携しながらいろんな丸太ハウス、牛小屋とか東屋とかも作ってまいりました。時間が余りありませんので急いで申し上げますが、必要性を感じたのは冒頭にも述べましたが、われわれの自己満足的な考えではだめだと、やはり地域の異業種の方、あるいは建築設計の方々広範な市民の方々と、「ただモノを買っていただく」とかではなく、対等な立場としてわれわれの持っているものをすべて出して信頼関係を築いていく、ということです。

山村も機械化が進み労働提携が難しい状態ですが、労働の提携、情報の提携・提供なり実際のニーズというもの、真の相互理解が必要だなと思います。山村でまじめに働く人は奥さんが来ない、そういう状況もただ農業委員会とかパンフを配っただけで結婚なんか出来るわけないですから、炭焼きなど体験交流を通じて解決していけるかなど。われわれも今までの態度をまじめに反省しますからぜひ市民の皆さんも山村とか農林業を理解できるように来ていただきたいと思います。私も仙台に来るもんだから一番立派な背広を着てきました。こういう熊みたいな手をしていますが、気持ちはやさしいですから、ぜひ皆さんと一緒に生きていこうと、今日山際先生の話聞いてさらにその感を強くしました。以上です。